

特設分科会「災害と学童保育」(A)の報告 つながり、そして共に

高橋 誠

第 51 回全国研特設分科会 世話人 全国学童保育連絡協議会 副会長

本稿では、二〇一六年一〇月二十九日・三〇日に愛知県で開催された第五一回全国学童保育研究集会(全国研)で行われた特設分科会「災害と学童保育」(A)について報告します。

全国研では、二〇一一年に開催した第四六回から毎年、特設分科会を設けています。今回の「災害と学童保育」(A)では、①災害によって心に大きな痛みを受けた子どもたちに見られる心身の変化の特徴、②そうした子どもたちと周囲の大人たち(保護者や指導員)を支えるうえで大切にしたい視点、③支援する人々をどのように支えていくか、④について、助言者の先生の講義を通じて学びとともに、各地域の現状などを交流し、心理的支援やケアの課題について、参加者と考えあうことをねらいとしました。

午前はまず、助言者の畑山みさ子先生(ケア宮城代表・宮城学院女子大学

名誉教授)より、被災をした子どもの心のケアのために必要なことについて講義をしていただきました。「心とはどこにあるのか」といった問いからはじまり、震災直後に多くの子どもに見られた心身の変化(急性心理反応)や、子どもの不安の原因に関する事柄についてお話しいただきました。

そして、学童保育の指導員が子どもの心のケアに関わる際に大切にしたいこととして、①安心できる環境の確保、②安全な「遊び」の場面と時間の確保、③子どもと個別に関わる時間を持つこと、④保護者との連携(保護者の心を支える)、⑤被災した保護者との会話の際に気をつけること、⑥指導員自身の精神的健康の保持、の六点についてご説明いただきました。

つづいて、福島県いわき市の指導員と宮城県七ヶ浜町の指導員より、東日本大震災当時の状況や子どもたちの様

子、現在の子どもたちの様子などについて、指導員の思い・関わりを交えながら報告していただきました。

午後からは、一組六名から七名に分かれてグループワークを行い、午前中の講義・報告を受けて感じたこと、震災以外の災害も含めた緊急時の対応、学校や地域との連携、情報共有の必要性、訓練・非常食の備蓄などについて、感想や経験を交流しました。畑山先生からは、「話を聴く際には『傾聴』の姿勢を持つことが大切。メモはとらず、さしびなへ目もとや口元を見て、相手をうちながら、話を聴いてほしい」とアドバイスをいただきました。

そして、グループワークの後には気持ちをおろしつかせるための呼吸法を教えてくださいいただき、「子どもと保護者の心の支援者は、まず自分自身の精神的健康を保つよう努めてほしい。自分のための時間をつくり、気分転換を図ること

と、仲間と支えあう関係をつくることと自分自身のケアを図ってほしい。決してがんばりすぎないように」との助言もいただきました。交流のなかでは、「震災直後の様子や子どもたちの現状についてお話をうかがい、胸がしめつけられる思いだった」との声もあがり、こうしたい思いにも配慮されている、畑山先生から具体的に適切なアドバイスを随時いただけたことは、参加者にとって貴重な学びの機会となったのではないのでしょうか。

* * *

私自身は、この分科会に世話人として参加するなかで、宮城県東松島市を訪問し、学童保育関係者の方々にお話をうかがったときのことを思い出しています。

東日本大震災以降、私の地元である東京都学童保育連絡協議会は、三多摩

学童保育連絡協議会と共催して、宮城県内の指導員をはじめ、学童保育に関わる方々との交流を図ってきました。東松島市を訪問する前日には、畑山先生が今回の分科会でも紹介くださった冊子『被災者の心を支えるために——地域で支援活動をする人の心得』(ケア宮城、プラン・シャパン、二〇一二年発行)を活用して学習会を行いました。

そうした経験、そして今回の分科会を通じて感じていることは、私たちが日常的にできることは少ないかもしれないが、学童保育の仲間として「つながる」ことはできるのではないかと……。とこのことを。後ろから支えるでも、前から引く張るでもなく、「横に並び、共に歩む」ことができたかと考えています。